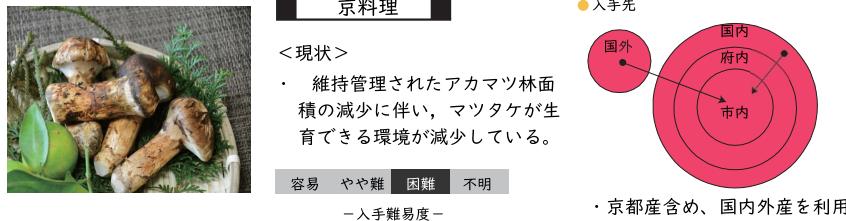


「京都らしさ」との関わり



生物資源の利用と調達状況の例



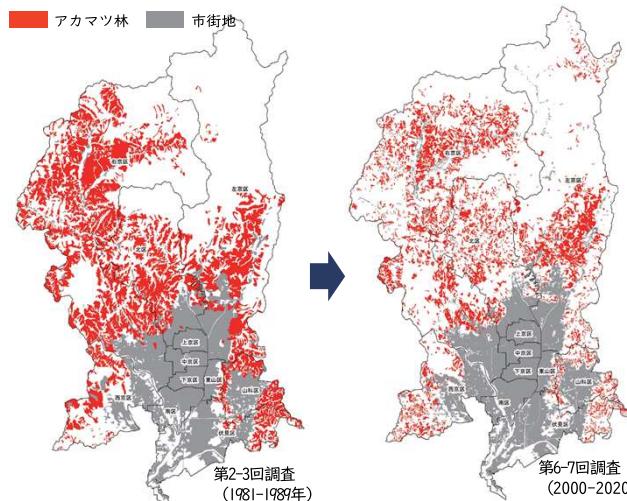
マツタケの分布と生態

マツタケはハラタケ目 キシメジ科に属する種で、京都府レッドデータブック 2015 では準絶滅危惧種として掲載されている。生態的特徴、必要な保全対策に記述されているとおり、西日本における食文化と関係が深かったこと、アカマツ林の管理不足等により減少したことなどが分かる。

選定理由	京都府は主要な生産地であり発生していたが、近年激減してしまった。
形態	傘は径8~10（最大45）cm、初め半球体、の中高の饅頭形となる。幼菌時は柄につば状被膜が残るが消失しやすい。肉は白色で堅い。柄は10~15cm×1.5~2cm。つば状被膜より上は白色、下部は傘表面と同様の茶褐色から黒褐色のさざくれた鱗片がある。ヨーロッパ、北アメリカの <i>T. Caligatum</i> (Viv.) Ricken は同一種とも言われている。
分布	日本全土。岩手県、広島県の生産量が多い。（ <i>T. Caligatum</i> : 北アメリカ、カナダ、ヨーロッパ、アルジェリア、朝鮮半島、中国大陸、モロッコ、台湾、チェコスロバキア）。 ◎府内の分布区域 1955~60年をピークとして減少、現在主産地は船井郡。
生態的特性	主にアカマツ、時にツガ、シラビソ、クロマツ、エゾマツ、稀にトドマツ林に発生する。昔は燃料用の落葉搔きでアカマツ林地は整地され、養分が少くなり、マツタケ発生に好環境をつくっていた。
必要な保全対策	絶滅危惧種ではないが、西日本の食生活に深くかかわってきたキノコだけに、マツタケモドキやショウウゲンジとともにアカマツ林を保護し、増やす方法を考える必要がある。山の手入れが必要である。

出典：京都府レッドデータブック 2015

分布（資源）量の推移



環境省が実施した自然環境保全基礎調査の第2-3回（1981-1989年）と第6-7回（2000-2020年）の調査結果を比較すると、アカマツ林の分布が大きく減少していることが分かる。特に、北区、左京区及び右京区における減少が顕著である。

出典：1/50,000及び1/25,000植生図「京都府 GISデータ（環境省生物多様性センター）」を使用し、作成。

減少理由と課題の整理

気象害

衰弱したアカマツは台風などの気象害の影響を受けやすい。

獣害

アカマツ林の維持管理不足で病虫害の影響から枯死木が増加している。

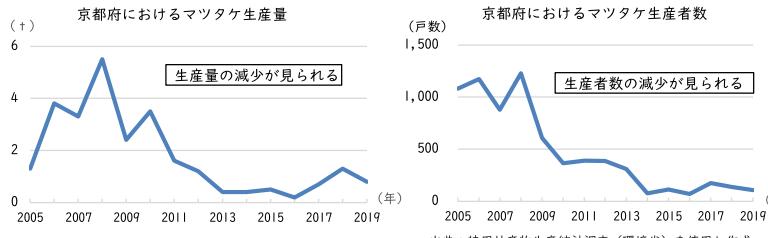
担い手（管理）不足



外来種

都市化

マツタケの生産量・生産者の推移



「京都らしさ」としての位置付け

指標種：マツタケ
ハビタット：アカマツ林

- ① 京料理等との関わりが深く、京都らしい食文化の伝統を継承していくには必要な生物資源。



- ② マツタケはアカマツ林とともに「京都らしさ」を支える生物資源。
- ③ アカマツ林というハビタットで保全再生を図りながら、アカマツ林管理ができる範囲で実施していくことが考えられる。



マツタケの生産には、アカマツ林が富栄養化しないように腐植層を搔き出したたり、アカマツと競合する樹木を伐採したりするなどの山の手入れが欠かせず、維持管理がされていないアカマツ林の林床では、落葉に寄生する他の菌類が多くなり、マツタケが育ちにくい環境となるため、マツタケの生産量が減少する。

生産量低下に伴い、生産者不足となり、それが維持管理不足へとつながる悪循環がある。